

報 告

- ◎ [JICA集団研修「森林研究コース・林産」が開講される](#)
- ◎ [集団研修開講式](#)
- ◎ [ブラジル・国立アマゾン研究所所長と科学技術省総合調整官が来日、当所を視察](#)
- ◎ [公開シンポジウム「森林、海洋におけるCO₂、炭素収支研究最前線」開催される](#)

◎ JICA集団研修「森林研究コース・林産」が開講される

去る9月1日、中国、ケニア、メキシコ、フィリピン、タイからの研修生を迎え、森林総合研究所理事長およびJICA筑波国際センター所長同席のもと、JICA集団研修「森林研究コース・林産」の開講式が行われました。開講式は日本語と英語を交えての自己紹介など和やかな雰囲気で行われました。この森林研究コースは1961年に始まり、これまでに45カ国、278名の研修生が当研究所での研修を終了し、母国で活躍しています。平成15年度は、5名の林産関連の研修員を受け入れ、11月下旬までそれぞれの研究室において研修を行います。



集団研修開講式

◎ インドネシア林業省の森林・自然保全研究開発センター所長が来所

9月3日午後、インドネシア林業省の森林・自然保全研究開発センター所長のFauzi Mas'ud氏の視察がありました。同センターは国際林業研究センター(CIFOR)を通して日本と荒廃材回復等の研究を行っており、当所とも関係の深い研究機関です。田中理事長をはじめ藤原、桜井、池田理事が研究概要を説明した後、海外研究領域の榎原チーム長がインドネシア熱帯降雨林の生物多様性の高さを具体的なデータで説明しました。午後は、清野森林植生研究領域長とクリーン開発メカニズム(CDM)についての研究打ち合わせを行いました。

インドネシア林業省森林・自然保全研究開発センター所長
(写真中央)

◎ ブラジル・国立アマゾン研究所所長と科学技術省総合調整官が来日、当所を視察

平成15年9月10日、ブラジル連邦共和国・アマゾナス州の都マナウスにある国立アマゾン研究所(INPA)の所長のJose Alves Gomes博士とブラジル科学技術省総合調整官のIsabel Canto博士が当所を視察しました。当所はアマゾン研究所に対して、JICA(現:国際協力機構)プロジェクト「ブラジル・アマゾン森林研究計画」を通じて8年間にわたり密接な研究協力を行ってきました。池田理事、沢田研究管理官を始め各研究領域のプロジェクト関係者が一同に会し両氏と話し合い、これからもこの協力関係を発展させて行くことを確認しました。



国立アマゾン研究所所長(右から二人目)

◎ 公開シンポジウム「森林、海洋におけるCO₂、炭素収支研究最前線」開催される

9月29日(月)午前10時～午後5時30分、東京大学農学部弥生講堂・一条ホールにおいて、(独)森林総合研究所、(独)水産総合研究センター主催の公開シンポジウム「森林、海洋におけるCO₂、炭素収支研究最前線」が開催されました。

シンポジウムでは、まず森林総合研究所池田理事による開催挨拶の後、神戸大学大学院金澤教授、東京大学海洋研究所所長小池教授による2題の基調講演が行われ、それぞれ森林、海洋のCO₂収支、炭素循環に関する国内外の研究の動向を詳しく解説して頂きました。続いて、森林におけるCO₂収支研究として、(1)林木の光合成・呼吸の特性、(2)ブナ林の光合成生産の環境応答、(3)日本の森林土壌における有機炭素の蓄積と分解、(4)森林生態系の炭素循環プロセスモデル、(5)日本の森林におけるCO₂フラックス観測、(6)日本の森林の炭素貯留量とその収支のマッピングについての研究成果が紹介されました。海洋部門では、(1)沿岸藻場分布の広域調査手法の開発、(2)大型海藻類はCO₂の収支にどれだけ寄与しているか、(3)我が国主要貝類の生物量と機能マップ、(4)日本周辺太平洋海域における大気-海洋間のCO₂収支の研究成果が紹介されました。最後に、「森林、海洋におけるCO₂収支研究の課題」と題して、7名のパネリストと会場を交えたパネルディスカッションが行われました。森林部門では、CO₂収支推定の面的なスケールアップ、森林施業の影響評価、吸収源としての森林管理のあり方などが議論されました。海洋部門では、バイオマス分布のデータベース化(センサスの必要性)、生物機能情報の集約化、収支から循環への研究展開の必要性が述べられ、これらは森林、海洋に共通した課題として認識されました。

当日は大学、試験研究機関、民間企業、行政、各種法人、マスコミ関係等、約120名の参加者が集まり、盛況のうちに幕を閉じました。



講演集